



相ノ木っ子だより

令和2年度
学校だより
5月号
上市町立相ノ木小学校

変わらぬ風景を眺めながら(前編) - 今を受け入れて -

グラウンドのハナミズキの花が満開となり、赤、ピンク、白のきれいなグラデーションを彩っています。周りの田は水で満ち、小麦の丈もずいぶん伸び、爽やかな風が吹くたびに波のように揺らいでいます。ツバメは田の水面ぎりぎりに水を切りながら飛び、カエルやヒバリの元気な声が聞こえ、時折四方からキジの声が響いてきます。学校周辺の自然や風景は、春から初夏への移り変わりを知らせ、例年と変わらぬにぎわいを見せています。しかし、校舎内はというと、午前中は放課後児童クラブの子供たちの声が聞こえてくるものの、一日のほとんどを静かな時を刻んでいます。



昨年度末から考えると、学校が臨時休業となって3か月目を迎えています。4月当初に数日間登校しましたが、5月の学校行事はなくなりましたし、わたしたちの出張や会合といったものも中止となり、校長室の行事予定白板は真っ白の状態です。そんな例年と違った生活が少しずつ当たり前になってきていることに不安を感じますし、ゴールの見えない自粛、我慢は、少しずつストレスを高めていきます。感染予防のために必要なことではありますが、子供たちの精神面に大きな影響を与えていないか心配です。わたしは、ウォーキング、読書、音楽鑑賞、部屋の整頓等、時間のメリハリをつけながらストレスを解消しています。ぜひ子供たちにも、生活に工夫を付けたり、気分転換を図ったりして、不安感やストレスをためることなく、前向きな思いをもち続けてほしいです。

それにしても、スキー教室を断念せざるを得ない暖冬に「なんて年だ」と嘆いていた1月に、誰が今の状況を想像していたのでしょうか。学校行事の中止どころではなく、臨時休業の長期化、生命の危機という現状から目を背けたくなるのはわたしだけではないでしょう。一晚眠れば夢から覚め、何事もなかった日常に戻ってくれないかと願ってしまいます。しかし、今起きていることは現実ですし、わたしたちはそこから逃れることはできません。人類にとっての大厄災ですが、震災等の災害によって家をなくしたり、水や電気等が供給されなかったりすることを考えると、家で思い思いの生活を送ることができるのはまだましなのかもしれません。

今を受け入れ、今を越える。

これは、日本を代表する車いすアスリートの土田和歌子選手の言葉です。彼女は、高校時代の交通事故による車いす生活、レース中の大クラッシュ等の試練を乗り越え、パラリンピックや世界選手権の車いすマラソンで金メダルを多数獲得しました。他に、「意味があって私はここにいるのだ」「試練は苦しみではなく人生を好転させるもの」「現状を受け入れなくては前に進めない」と著書の中で書いています。感染者や医療従事者の方々の大変さを考えると不謹慎かもしれませんが、今後の自分の人生に生かしていけることとして、この厄災を前向きに捉えることができるかもしれません。

大病を患った人が、一日一日を普通に生きることがとてつもない奇跡であり、何気ない日常への感謝や周囲の風景への新鮮さを感じるとよく聞きます。実際、わたしたちは今、当たり前のように外出していることができるようになることを熱望していますし、人と触れ合える日常を心待ちにしています。今の試練を受け入れ、乗り越えることで、きっとこれまでと違った気持ちでこれからの生活を送ることができるのではないのでしょうか。開き直り、腹をくくって、今を受け入れて生きていこう、そんなポジティブ・シンキングでがんばっていきましょう。後編に続きます。

変わらぬ風景を眺めながら(後編) - 主体的・対話的で深い学びを -

今年度から新学習指導要領が完全実施となり、学校では「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業の充実を図っていきます。それは、「自分のよさや可能性を認識し、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会を創る子供」を育てることが学校に求められているからです。そして、子供に身に付けさせるべき資質・能力を明確にした教育実践に向け、これまでの「知識・理解」「技能」「思考・表現」「関心・意欲・態度」の4観点ではなく、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の3観点で指導し、評価します。つまり、より一層子供たちの主体性、語りかけや学び合い、学びの連続性といったものを大事にして授業を構築していく必要があるわけです。

これまでわたしたちは、学習の主体者である子供たちが自ら課題をもち、解決に向けて試行錯誤する「子供たちが主となって、自分たちで授業を進めていく」授業の確立を目指してきました。ですから、これまで積み重ねてきたことを基に、子供たちの自律的な学習をさらにしっかりと支え、学んだことを活用・実感・再考できるようにしてあげることが大事だと考えます。子供たちにとってよき指導者かつ、よき支援者であることが、わたしたちの使命であり、子供たちの生きる力を育む上で欠かせない役割だと思います。

県民の自粛等のがんばりによって、今月に入って感染拡大はやや収まってきました。とは言え、まだまだ授業は再開できません。家庭で少しでも主体的な学びになるよう、先生方は苦心して学習課題を作成し、配付していますが、やはり限界があります。授業は、担任の先生方と子供たちとつくり上げていくものだからです。子供たちには、再開に向け、家庭で学習内容をしっかりと身に付けてもらうしかありません。また、「ステイホーム」「巣ごもり」の状態でも、学びに向かう力や人間性を高めることができます。少しでも自分の見識を広め、深める努力をしていきましょう。そういった地道な努力を通して、子供たちが自分で課題を見つけ、追究を深めていく学びの基本が身に付いてくることと思います。

疑いをもたない秀才より、
好奇心をもった劣等生になりなさい。

これは、作家塩野七生さんの言葉です。知ることよりも感じる事が大事であり、常に知的好奇心をもち、疑問に思ったことを徹底的に調べていくことが大切です。また、エッセイストのオリヴァー・ウェンデル・ホームズは、次のように言っています。

知識と木材は
よく乾くまで使ってはならぬ。

新しい知識をひけらかすことは、生乾きの木材のように反り返って使い物になりませんが、体験を通して知識が裏打ちされていけば、合板のように強くて役立つものになるものです。学んだことを経験として生かすことを積み重ねることで、その人の「生きる知恵」として将来にわたっても役立っていくことでしょう。

学校で学習することが当たり前のようにできなくなった現実を子供たちは目の当たりにしています。前編でもふれた通り、きっと子供たちは友達との学び合いを渴望していることでしょう。学びに向かう力を大きくするチャンスです。この大厄災の経験をプラスに考え、時間を有効に使い、自分の興味・関心のあるものについて「進んで知ろう・探ろう・試そう」のよい機会になります。そして、自分で粘り強くどんどん学びを深めていきましょう。自分でその意味や意義を感じ、真にわかる体験を増やしていきましょう。そうすることで、授業再開後の子供たちの学びの質はずいぶん変わってくると思います。

